

高齢者介護サービス事業施設の職員における高齢者レク活動 支援力向上についての期待(2)

～ セミナー参加者における経験年数別によって ～

○ 廣田治久（余暇問題研究所） 山崎律子（〃） 高橋和敏（〃）

キーワード： 介護サービス事業施設、高齢者レク活動、支援力

1. はじめに

昨年本学会大会において「高齢者介護サービス事業施設の職員における高齢者レク活動の支援力向上についての期待」（廣田、山崎、上野 レジャー・レクリエーション研究 59号 2007年）を発表した。施設職員が直面するレク活動支援における問題意識を分析し、その結果をKJ法により11項目にまとめた。その主なものは“すぐに活用できる活動の修得”“様々な特徴を持つ利用者への対応の修得”“それらの利用者への集団支援法の修得”“職員間の問題解決（とくにチームワーク）”が挙げられた。そしてその解決への期待が明らかとなった。

このような結果を得る中で、さらに介護現場のレク活動支援に対する問題意識を探るために“職員の経験年数によってその内容に違いがあるだろうか”という疑問が湧いた。そこで今回は昨年の継続研究として介護職の経験年数にみた傾向を把握することで、より精密に現場の状況を明らかにできると考えた。

これらの状況を明らかにすることは、高齢者介護施設でのレクリエーション活動の充実を図る上で、ひいては高齢者のQOL向上を目指す上でも重要な示唆を得ることにつながると思われる。

2. 目的

本研究は、継続研究として昨年の研究から得られた知見をもとに、介護施設職員の経験年数からみた職員の問題意識を探ることを目的とした。

3. 研究方法

- ・ 対象はA社が主催する介護施設職員向けの「レクリエーション・セミナー」の参加者。セミナーの開催時期は2008年4/21～9/4。14回を開催。
- ・ 参加者に行ったアンケートの中から「こんな内容を受けてみたい」に記述された自由回答を抽出。それらを昨年の研究で分類した11の項目に照らし合わせ、その結果と新たに設定した「介護施設での経験年数」と合わせて考察を行う。

4. 結果

＜表1＞アンケート結果の分類

回答数

	1年未満	2年未満	3年未満	4年未満	5年未満	5年以上	小計
活動自体を知りたい	11	19	21	11	10	65	137
認知症	1	4	1	3	3	14	26
マヒ、目耳不自由	2	10	6	3	2	20	43
拒否・消極的	2	0	0	4	4	2	12
転倒・介護予防	3	2	0	4	2	8	19
身体機能、筋トレ	0	0	0	7	2	9	18
介護度、身体機能の異なる集団	1	1	5	5	2	4	18
集団指導法	3	5	6	6	4	10	34
現場を見たい	0	1	0	0	3	4	8
レクリエーションの理解	0	3	5	1	0	2	11
職場/職員	0	1	1	1	0	7	10
計	23	46	45	45	32	145	336

回答内容を11の項目と経験年数で分類し、その回答数をまとめた結果が<表1>である。今回は傾向の概要を知るために単純集計のみに留めた。アンケートの記入方法が自由回答であったため、その表現は「手遊びなどのレク」「マヒの人にゲーム/体操」など、その言葉の使い方は不統一であり、本研究では総じてレク活動として解釈することとした。

5. 考察

- ◆ 表1から、アンケート回答数の経験年数別の分布は、2年未満からが多い結果であった。入職後1年を経てレク活動の知識や技術を求めているのではないかと考える。
- ◆ 項目ごとでは「活動自体を知りたい」が圧倒的多数である。記述内容を見ると、経験年数が2年未満以後の職員が知りたい活動に対して、“高齢者の好む音楽を使った”“短い時間でできる”など、より具体的な回答が見られる。すぐに使える内容を求める自然な要求と考えられるが施設ごとに対象者を把握し、支援法に変化をつけるなどの工夫することなく、安易な方向に意識が広がることが懸念される
- ◆ 「マヒ、目耳不自由」は、ADLの低下、体の障害を持つ施設利用者へのレク活動に関する項目である。全体の中でも2番目に要望の高い項目であることから、それらに対応したレク活動に苦慮していることが推察される。
- ◆ 「拒否・消極的」は、職員が支援するレク活動に対して、拒否または消極的な利用者に関する項目である。全体数は少ないものの男性高齢者を対象とする回答が多く見られた。実際の現場で職員の方々の話やセミナー参加者から質問にこれらのことが多く聞かれることから、現在介護現場の直面する大きな課題と考える。
- ◆ 筋トレに代表される身体機能向上に関する回答は、4年未満以降から多く見られる。「転倒・介護予防」と合わせると回答数は37となる。これらは介護現場において利用者のADLの維持・向上の効果をレク活動に求めているのではないかと考える。またこの現状と経験年数の関係は、職員が年数を経っていく中で個々にそのことを意識し、職場においては経験年数から、その効果を求められる立場にあるのではないかと推測する。
- ◆ 「集団指導法」の項目では、記載内容を見ると経験年数が増える中で話し方や参加を促す雰囲気作り、レク活動の企画、進行の仕方など具体的内容が見られた。高齢者レク活動の支援を実践する中で『対象者の把握』の上に立った対応の仕方・支援法が重要と認識しているが、介護職員は様々な特徴を持つ高齢者の集団に対して指導技能の不足を感じていることが推察される。これらの現状を垣間見の中では、今後も職員へのセミナーなどでの教育内容をより吟味し、その提供に努力していく必要があることを強く感じる。

6. まとめ

全体的にみて“介護現場でのレク活動支援に直面している職員は、その経験を経るにつれて学びたい内容が具体的で、より現場に即したものになっている”とまとめられよう。さらにこの実践研究を通じて感じられることは、職員がレク活動支援法の素地が十分でない中でレク活動支援を担当することはしばしば苦痛を伴うことにもなり、その支援への意欲低下やひいては施設を利用する高齢者にも影響することが懸念される。

レク活動支援の教育機会の提供は、現場の期待に答えるものと考え。しかし、その機会として従来まで介護資格取得時に必要とされてきた「レクリエーション活動援助法」が削除されることは、今回の研究結果や現場の現状をみても憂慮すべき問題と考える。